

『こころ』 覚書

——「先生」は何故自殺したか——

橋 本 威

一

漱石の『こころ』は、「私」の、かなり後年からの回想として書かれている。「私は今此悲劇に就いて何事も語らない。」(上・十二)という記述が、それを如実に示している。全篇「先生」の「遺書」を直接掲げた「下 先生と遺書」も、「私」の回想に包まれた部分だという性格を、免れ得ぬ。従って、「下」のみに立脚した『こころ論』に偏りの見られるのも、当然のことである。

『こころ』の出来事を語る△現在Vの「私」がどのような人間であり、どのような境遇にあるかは、作品から直接知る由もない。知る由もないが故に、△現在Vの「私」は、「まだ若若しい書生であつた」(上・二)頃の「私」と異なり、『こころ』世界の事象に対し、一応の客観的立場を保証されている。△現在Vの「私」は、いわば作品世界の提供者である。だから、その立場は、『こころ』世界の創造者——△神Vである作者漱石のそれに近いと見ることが出来る。作者漱石が「先生」の存在を究極的にどう認めているかは、「私」が「先生」をどう回想しているかによって知られるのである。それは、「先生」の「遺書」をそのまま掲げた形の「下」には全く示されていない。それが明瞭に見られるのは、「上 先生と私」に於いてである。

この際、「先生」が夏目金之助その人であり、「私」が小宮豊隆であるといった類のモデル論は、必要ない。仮に、『こころ』世界の住人「先生」のモデルが夏目金之助であつたとしても、モデル夏目金之助氏と作者漱石とは別人である。また、「まだ若若しい書生であつた」「私」のモデルが小宮豊隆であつたとしても、△現在Vの「私」に対して、豊隆はモデル性を喪失していると言つてよい。付言すれば、全てのモデル論は、そのモデルを契機として如何に作中人物を造型したかという、作品造型の過程を説き明かすとき、初めて文学研究として有効な

ものとなる。逆に作中人物をモデルに還元してしまう作業は、作品の文学性を殊更に抹殺する結果をしか齎すまい。
△現在Vの「私」は、「先生」を、次の如き記述に見られる人物として回想している。

○^{傷ましい}先生は、自分に近づかうとする人間に、近づく程の価値のないものだから止せといふ警告を与へたのである。他の懐しみに応じない先生は、他を軽蔑する前に、まづ自分を軽蔑してゐたものと見える。(上・四)

○私は最初から先生には近づき難い不思議があるやうに思つてゐた。それでゐて、何うしても近づかなければ居られないといふ感じが、何処かに強く働いた。(上・六)

○人間を愛し得る人、愛せずにはゐられない人、それでゐて自分の懐に入らうとするものを、手をひろげて抱き締める事の出来ない人、——是が先生であつた。(上・六)

○かつて遊興のために往来をした覚えのない先生は、飲楽の交際から出る親しみ以上に何時か私の頭に影響を与へてゐた。ただ頭といふのはあまりに冷か過ぎるから私は胸と云ひ直したい。肉のなかに先生の力が喰ひ込んでゐると云つても、血のなかに先生の命が流れてゐると云つても、其時の私には少しも誇張でないやうに思はれた。(上・二十三)

○要するに先生の葬しは贅沢とはいへない迄も、あたじけなく切り詰めた無彈力性のもではなかつた。(上・二十七)

以上のような部分に、作者漱石にとつての、「先生」の位置が示されている。これらを無視して、「下」の部分だけから直接「先生」の人物論を形成しては、「先生」を實在の人物として扱つたと同様になつてしまふだろう。とりわけ、

「人間を愛し得る人、愛せずにはゐられない人、それでゐて自分の懐に入らうとするものを、手をひろげて抱き締める事の出来ない人」という記述は、見逃せない。

二

漱石の小説には、度々、憧憬の対象となり得る清々しい女性が登場している。その背後に、作者の女性崇拜があるのか、或るいは、世に喧しい嫂問題があるのかについては、今は論じない。『こころ』に於けるそれは、無論、「先生」の「奥さん」である。「私」にとつても、「奥さん」は憧憬的存在だと言えそうである。次のようにある。

○先生の奥さんには其前玄関で会つた時、美しいといふ印象を受けた。それから会ふたんに同じ印象を受けない事はなかつた。(上・八)

○先生は『おい静』と何時でも懐の方を振り向いた。その呼びかたが私には優しく聞えた。返事をして出て来る奥さんの様子も甚だ素直であつた。(上・九)

○『書生時代から先生を知つてゐらつしやつたんですか』／奥さんは急に薄赤い顔をした。(上・十一)

○自分に頭脳のある事を相手に認めさせて、そこに一種の誇りを見出す程に奥さんは現代的でなかつた。奥さんはそれよりもつと底の方に沈んだ心を大事にしてゐるらしく見えた。(上・十六)

○私は奥さんの理解力に感心した。奥さんの態度が旧式の日本の女らしくない所も私の注意に一種の刺戟を与へた。それで奥さんは其頃流行り始めた所謂新しい言葉などは殆ど使はなかつた。(上・十八)

○『私はとうとう辛抱し切れなくなつて、先生に聞きました。私に悪い所があるなら遠慮なく云つて下さい、改められる欠点なら改めるからつて。すると先生は、御前に欠点なんかありやしない、欠点はおれの方にある丈だと云ふんです。さう云はれると、私悲しくなつて仕様がないうんです、涙が出て猶の事自分の悪い所が聞きたくなるんです』／奥さんは眼の中に涙を一杯溜めた。(上・十八)

○奥さんは私の頭脳に訴へる代りに、私の心臓を動かし始めた。(上・十九)

「奥さん」は、古きよきものと、新しきよきものとを、兼ね備へ有つた好まし

い女性として、印象づけられる。だが、「奥さん」と「先生」とは、「仲の好い夫婦の一对であつた」(上・九)にも拘らず、必ずしも心は契合してゐなかつた。それを、「奥さん」は「私」に、次の通りに語っている。

『私は嫌はれるとは思ひません。嫌はれる訳がないんですもの。然し先生は世間が嫌ひなでせう。世間といふより近頃では人間が嫌ひになつてゐるんでせう。だから其人間の一人として、私も好かれる筈がないぢやありませんか』(上・十七)

そのことを、「先生」の「遺書」は、次の如く述べている。

妻はある時、男の心と女の心とは何うしてもびたりと一つになれないものだらうかと云ひました。私はただ若い時ならなれるだらうと曖昧な返事をして置きました。妻は自分の過去を振り返つて眺めてゐるやうでしたが、やがて微かな溜息を洩らしました。(下・五十四)

そして、「先生」は、

妻に凡てを打ち明ける事の出来ない位な私ですから、自分の運命の犠牲として、妻の天寿を奪ふなどといふ手荒な所作は、考へてさへ恐しかつたのです。(下・五十五)

という理由で、

私は妻を残して行きます。私がゐなくなつても妻に衣食住の心配がないのは仕合せです。私は妻に残酷な驚怖を与へる事を好みません。私は妻に血の色を見せないで死ぬ積です。妻の知らない間に、こつそり此世から居なくなるやうにします。私は死んだ後で、妻から頓死したと思はれたいのです。(下・五十六)

という形で自殺してしまふ。

かかる設定では、「奥さん」への同情論が出るのも、いわば人性の自然である

うか。そして、「先生」の、前掲の「私がゐなくなつても妻に衣食住の心配がないのは仕合せです」や、次の言葉が採り上げられて、非難されることとなる。

私は妻には何も知らせたくないのです。妻が己の過去に対してもつ記憶を、成るべく純白に保存して置いて遣りたいのが私の唯一の希望なのですから、
(下・五十六)

この世の現実問題として、一見相思相愛の夫婦が居り、その裏、夫に何らかの秘密があつて、その為に、夫が妻に何も知らせずに自殺したとすれば、我々は、その妻に満腔の同情を捧げていい。何も告げずに死んだ夫の心持ちも解るとして、夫を非難したくなるのも亦、一面の真理を有しているだろう。

だが、『こころ』は小説世界であり、△現在▽の「私」が次の如くに判断していることに、注目しなければなるまい。

先生は美しい恋愛の裏に、恐しい悲劇を持つてゐた。さうして其悲劇の何んなに先生に取つて見惨なものであるかは相手の奥さんに丸で知れてゐなかつた。奥さんは今でもそれを知らずにゐる。先生はそれを奥さんに隠して死んだ。先生は奥さんの幸福を破壊する前に、先づ自分の生命を破壊して仕舞つた。(上・十二)

特に、「奥さんの幸福を破壊する前に」とあるのに留意すべきであろう。それは、「妻が己の過去に対してもつ記憶を、成るべく純白に保存して置いて遣りたい」という「先生」の言葉と対応している。

「奥さん」の像が好ましいが故に、我々は「奥さん」についての重要な一面を見逃しているのではないか。

「K」の自殺の原因が何であれ、「K」の悲劇が「奥さん」——「御嬢さん」への恋に始まることは、否定できぬ。それも、単に「御嬢さん」が「K」の身近に存在していたことによるのではない。「先生」の「遺書」に語られている次のような経過を見逃すことは、出来ないのである。

○私は急ぎ足に門前迄来て、格子をがらりと開けました。それと同時に、私は御嬢さんの声を聞いたのです。声は體にKの室から出たと思ひました。(中

略) 私はすぐ格子を締めました。すると御嬢さんの声もすぐ己みしました。(中略) 私がごこんで其靴紐を解いてゐるうち、Kの部屋では誰の声もしませんでした。私は交に思ひました。ことによると、私の勘違ひかも知れないと考へたのです。然し私がいつもの通りKの室を抜けようとして、襖を開けると、其処に二人はちやんと坐つてゐました。Kは例の通り今帰つたかと云ひました。御嬢さんも「御帰りに」坐つた假で挨拶しました。私には氣の所為か其簡単な挨拶が少し硬いやうに聞えました。何処かで自然を踏み外してゐるやうな調子として、私の鼓膜に響いたのでした。(下・二十六)

○一週間ばかりして私は又Kと御嬢さんが一所に話してゐる室を通り抜けました。(中略) 夕飯の時、御嬢さんは私を交へだすと云ひました。私は其時も何故交へるのか聞かずにしまひました。ただ奥さんが睨めるやうな眼を御嬢さんに向けてるのに氣が附いた丈でした。(下・二十七)

○私は戻つて来ると、其積で玄関の格子をがらりと開けたのです。すると居なれと思つてゐたKの声がひよいと聞えました。同時に御嬢さんの笑ひ声が私の耳に響きました。私は何時ものやうに手数のかかる靴を穿いてゐないから、すぐ玄関に上がつて仕切りの襖を開けました。私は例の通り机の前に坐つてゐるKを見ました。然し御嬢さんはもう其処にはゐなかつたのです。私は恰もKの室から逃れ出るやうに去る其後姿をちらりと認めた丈でした。(中略) 私が自分の室に這入つて其假坐つてゐると、間もなく御嬢さんが茶を持つて来て呉れました。其時御嬢さんは始めて御帰りにといつて私に挨拶をしました。(中略) 御嬢さんはすぐ座を立つて縁側伝ひに向うへ行つてしまひました。然しKの室の前に立ち留まつて、二言三言内と外とで話しをしてゐました。(下・三十二)

○そのうち御嬢さんの態度がだんだん平氣になつて来ました。Kと私が一所に宅にゐる時でも、よくKの室の縁側へ来て彼の名を呼びました。さうして其処へ入つて、ゆつくりしてゐました。(中略) ある時は御嬢さんがわざわざ私の室へ来るのを回避して、Kの方ばかりへ行かうと思はれる事さへあつた位です。(下・三十二)

○私は不図賑やかな所へ行きたくなつたのです。(中略) するとKのすぐ後に一人の若い女が立つてゐるのが見えました。近眼の私には、今迄それが能く分らなかつたのですが、Kを遣り越した後で、其女の顔を見ると、それが宅の御嬢さんだったので、私は少からず驚きました。御嬢さんは心持薄赤い顔をして

私に挨拶をしました。(下・三十三)

○然し食事の時、又御嬢さんに向つて、同じ問を掛けたくなりました。すると御嬢さんは私の嫌ひな例の笑ひ方をするのです。さうして何処へ行つたか中て見ると仕舞に云ふのです。(中略)私はそれをKに対する私の嫉妬に帰して可いものか、又は私に対する御嬢さんの技巧と見做して然るべきものか、一寸分別に迷ひました。(下・三十四)

○私はKに一体百人一首の歌を知つてゐるのかと尋ねました。Kは能く知らないと答へました。私の言葉を聞いた御嬢さんは、大方Kを軽蔑するとても取つたのでせう。それから眼に立つやうにKの加勢をもしました。仕舞には二人が殆ど組になつて私に当るといふ有様になつて来ました。(下・三十五)

これらの「K」に対する「御嬢さん」の態度が、次第に「先生」の「K」に対する嫉妬心を高めて行く訳だが、この間に、「K」の方から積極的に「御嬢さん」に近づいた兆候は見えぬ。「先生」の疑心暗鬼を割り引いても、これは、「御嬢さん」の方から「K」に積極的に近づいたものである。勿論、かつて「先生」は、「蔭へ廻つて、奥さんと御嬢さんに、成るべくKと話しをする様に頼」(下・二十五)んだものではあつたが、これらの「御嬢さん」の行動は、その依頼の範囲を超えたものであらう。とすれば、「御嬢さん」は次第に「K」に魅かれて行つたのか。否である。そのことは、「先生」から結婚の申し込みを受けた後の「御嬢さん」の態度や、結婚後の夫婦仲などから、断言できる。後年の「奥さん」は、「私」に、「何故其方が死んだのか、私には解らないの」(上・十九)と言つてゐる程である。

これらの不可解な「御嬢さん」の態度は、「先生」の嫉妬心を煽り立て、自分に気をひく爲に行つた可愛らしい「技巧と見做して然るべきもの」であらう。だが、可愛らしいものであれ、これらの態度によつて、「K」の恋は、生じ、高められて行つたのだ。換言すれば、「御嬢さん」は「K」の心を無邪気に弄んだのである。「K」の悲劇が「御嬢さん」への恋に始まつたとすれば、その悲劇の演出者は、「御嬢さん」だったのである。

もし漱石が好んで女性を主人公にする作家だつたとすれば、「先生」の椅子に、「奥さん」が座らされたかも知れぬ。もし「先生」の自殺が友人を自殺に追い込んだ己のエゴに絶望した故のものであるとすれば、それにかわつて、「奥さん」が、一人の真摯な若者を自殺に追いやつた己のエゴに絶望するという筋立て

で、自殺させられたかも知れぬ。

しかし、「奥さん」は、まるっきり無邪氣であつた。その「純白」を暗黒に汚す勇氣のなかつた「先生」に、非難を加へるべきではない。と言ふより、それを為し得なかつたところに、人人間Vに対する「先生」の寂しさと優しさが立証されている。と同時に、それを為し得なかつたとしても、漱石は、「奥さん」も亦「先生」の同類たることを示し、「先生」の普遍性を保証している。「奥さん」に自分の罪を自覚させ、それを告げて呉れなかつた最愛の夫との距離をつづく寂しがらせて、「先生」の後追い心中をさせなくても、「こころ」はその主題を十分に伝へ得ているのである。

三

「K」の自殺の原因について、我々は、作品外から様々な臆測を試みることを、慎まねばならぬ。よしんば、それを試みたとしても、作品外から勝手に想像した「K」の自殺の原因など、「先生」の自殺の原因を語る材料として、何の価値もないであらう。問題は、実は、何故「K」が自殺したかということではなく、「K」の自殺の原因を、同じ登場人物である「先生」がどのように解釈していたか、ということである。

「K」が「先生」に裏切られて、若しくは失恋して自殺した、という類の把握は、一切首肯できぬ。「K」の遺書に記されていたその理由は、「自分は薄志弱行で到底行先の望みがないから、自殺するといふ丈なのです」(下・四十八)と「先生」の「遺書」に述べられてゐる。これは、素直に受けとらねばならぬ。と言ふのも、「K」が自殺した夜、「先生」は、「私は枕元から吹込む寒風で不図目を覚めたのです。見ると、何時も立って切つてあるKと私の室との仕切りの襖が、此間の晩と同じ位開いてゐます」(下・四十八)という状態で目覚めるのだが、それは、次の通りの「此間の晩」の状態と対応している。

私は程なく穏かな眼りに落ちました。然し突然私の名を呼ぶ声で眼を覚ました。見ると、間の襖が二尺ばかり開いて、其処にKの黒い影が立つてゐます。さうして彼の室には宵の通りまだ澄火が点いてゐるのです。急に世界の交つた私は、少しの間口を利く事も出来ずに、ぼうつとして、其光景を眺めてゐました。其の時Kはもう寝たのかと聞きました。Kは何時でも遅く迄起きてゐる男でした。私は黒い影法師のやうなKに向つて、何か用かと聞き返しまし

た。Kは大した用でもない、ただもう寝たか、まだ起きてゐるかと思つて、便所へ行つた序に聞いて見た丈だと答へました。Kは洋燈の灯を背中を受けてゐるので、彼の顔色や眼つきは、全く私には分りませんでした。けれども彼の声は不断よりも却つて落ち附いてゐた位でした。／＼(中略)それで飯を食ふ時、Kに聞きました。Kはたしかに襖を開けて私の名を呼んだと云ひます。何故そんな事をしたのかと尋ねると、別に判然した返事もしません。調子の抜けた頃になつて、近頃は熟睡が出来るのかと却つて向うから私に問ふのです。私は何だか寝に感じました。(下・四十三)

この時、既に「K」は自殺を決意してたと、見るべきであらう。だからこそ、「先生」の可否を尋ねてゐるのであらう。そして、この時点では、「先生」はまだ「御嬢さん」に結婚の申し込みをしていない。とすると、「先生」が「K」に一撃を加えた「公園」の場に於ける次の叙述は、「K」が既に自己破壊の方向で身の処置を考えていたことになる。

すると彼は卒然「覚悟？」と聞きました。さうして私がまだ何とも答へない先に『覚悟——覚悟ならない事もない』と附け加へました。彼の調子は独言のやうでした。又夢の中の言葉のやうでした。(下・四十二)

「先生は」「策略」を用いて「K」の前に横たはる恋の行手を藝がうとした(下・四十二)のであったが、「K」自身にとっては、その自殺は、「理想と現実の間に彷徨して」(下・四十一)行き詰まった結果のものでしかなかつた。従つて、後に「先生」の「御嬢さん」への求婚を知つた時の「K」の態度は、既に死を決した者の、達観したものとなる。次の通りである。

奥さんの言ふ所を綜合して考へて見ると、Kは此最後の打撃を、最も落附いた驚きをもつて迎へたらしいのです。Kは御嬢さんと私との間に結ばれた新しい關係に就いて、最初は左右ですかとただ一口云つた丈だつたさうです。然し奥さんが、『あなたも喜んで下さい』と述べた時、彼ははじめて奥さんの顔を見て微笑を洩らしながら、『御目出たう御座います』と云つた仮席を立つたさうです。さうして茶の間の障子を開ける前に、また奥さんを振り返つて、『結婚は何時ですか』と聞いたさうです。それから『何か御祝を上げたいが、私は

金がないから上げる事が出来ません』と云つたさうです。(下・四十七)

「撰欲や禁欲は無論、たとひ欲を離れた恋そのものでも道の妨害になる」(下・四十二)「K」にとつて、「先生」の人裏切りは問題外であつた。「K」の遺書に「私に取つて(中略)辛い文句」(下・四十八)がなかつたのは、当然であつた。「K」が遺書に「もつと早く死ぬべきだのに何故今迄生きてゐたのらうといふ意味の文句」(下・四十八)を「書き添へた」(同)のは、「先生」に不必要な苦しみを与えまいと配慮した友情の率直な表れだつたと見てよい。「御嬢さん」の方は、「K」の自殺の原因に直接関わる存在である。だから、「K」は、「御嬢さんの名前」を出して彼女に迷惑の及ぶことを恐れ、それを「わざと回避した」(下・四十八)のであつた。

しかし、「先生」自身は、「K」の死因に関して、次の通りに書き記してゐる。

同時に私はKの死因を繰返し繰返し考へたのです。其当座は頭がただ恋の一字で支配されて居た所為でもありませんが、私の観察は寧ろ簡單でもしかも直線的でした。Kは正しく失恋のために死んだものとすぐ極めてしまつたのです。しかし段段落ち附いた気分、同じ現象に向つて見ると、さう容易くは解決が著かないやうに思はれて来ました。現実と理想の衝突——それでもまだ不十分でした。私は仕舞にKが私のやうにたつた一人で淋しくつて仕方がなくなつた結果、急に所決したのではなからうかと疑ひ出しました。さうして又傑としたのです。私もKの歩いた路を、Kと同じやうに辿つてゐるのだといふ予覚が、時折風のやうに私の胸を横通り始めたからです。(下・五十三)

「先生」が冷静になつてから、「K」の死因として、「失恋」を否定したのは、尤もである。だが、「現実と理想の衝突」をまで何故否定するようになったのか——そこにこそ、「先生」の死に至る気分が語られてゐるのである。

四

「先生」の自殺を、罪や醜惡なエゴイズムに対する処罰としての自己否定だとする解釈が、いわば一種の定説として行きわたつてゐる。次の如くである。

○「心」においては、利己心の果てにおかした罪をつぐなうために完全な自我否定としての自殺を描いている。(和田繁二郎『近代日本文学史』)

○「先生」は、青年のとき犯したあやまちのために、後年自殺する。罪と罰がこの作品の主題である。(荒正人「漱石文学の魅力」―近代文学鑑賞講座5『夏目漱石』)

だが、かかる理解は、次の通りの、所謂殉死問題に、如何なる解答を用意するものであろうか。

すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。其時私は明治の精神が天皇に始まつて天皇に終つたやうな気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、其後に生き残つてゐるのは必竟時勢遅れだといふ感じが烈しく私の胸を打ちました。(中略)私は妻に向つてもし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死する積だと答へました。私の答へも無論笑談に過ぎなかつたので、私は其時何だか古い不要な言葉に新しい意義を盛り得たやうな心持がしたのです。(下・五十六)

右の部分は、大江健三郎の「そもそも殉死とは、一般的に自己処罰であろうか」(「記憶して下さい。私は斯んな風にして生きて来たのです」)という反論に直結している。と同時に、『こころ』の主題は、次のように、二つに分裂させられてしまうことになる。

『こころ』の主題が、死というものに人間を導く過程の解明にあることはいうまでもない。(中略)人間のエゴは否定されなければならぬ。自己を全く否定し破壊する。死による倫理の達成である。それは漱石の倫理の頂点を示すものであろう。なお、『こころ』には今一つの主題、すなわち時代意識、あるいは世代意識というものがある。(吉田精一編『日本文学鑑賞辞典』、井上百合子執筆)

『近代日本思想史の基礎知識』の『こころ』の解説(飛鳥井雅道執筆)は、『天皇崩御』を「先生」の自殺の「キッカケ」と説明する。だが、明治天皇の崩御や乃木大将の殉死が、「先生」の自殺の単なる一つの「キッカケ」にしか過ぎ

ぬとしたら、「中 両親と私」に見られる次の如き部分は、「先生」が「明治の精神に殉死することと共に、主題に集約されない異質の部分だということになってしまふだろう。

○崩御の報知が伝へられた時、父は其新聞を手にして、『ああ、ああ』と云つた。／『ああ、ああ、天子様もとうとう御かくれになる。己も……』／父は其後を云はなかつた。(中・五)

○乃木大将の死んだ時も、父は一番さきに新聞でそれを知つた。／『大塚だ大塚だ』と云つた。／何事も知らない私達は此突然な言葉に驚かされた。(中・十二)

○父は時時囁語を云ふ様になつた。／乃木大将に濟まない。実に面目次第がない。いえ私もすぐ御後から／斯んな言葉をひよいひよい出した。(中・十六)

推理小説もどきと言ってよい程の伏線を張りめぐらし、恐らく筋立ての上ではその為に、「当時の予告には数種の短篇を合してそれに『心』といふ標題を冠らせる積だと読者に断つたのであるが、其短篇の第一に当る『先生の遺書』を書き込んで行くうちに、予想通り早く片が附かない事を発見したので、とうとうその一篇文を単行本に纏めて公にする方針に模様をへをした」(序)というこの作に於いて、「明治の精神に殉死する」ことは、単に便宜的に、突如として持ち出されたものではあり得ない。

一体、「先生」は、自殺に至る前の日々で、どのような気分支配されていたのであろうか。それは、既に掲げた、「K」の自殺の原因を考える部分に示されている。そして、それは、叔父に対する不信に発する他人への不信から、自己の中に叔父を発見した自己不信を経て、人間不信に陥つた者の有する孤絶感――絶対的な寂寥であった。「K」の自殺について、「私は仕舞にKが私のやうにたつた一人で淋しくつて仕方がなくなつた結果、急に所決したのではなからうかと疑ひ出」すのも、自分を「K」に投影し、感情移入した結果に他ならぬ。

「先生」の自殺の原因を一語で片付けるならば、「孤独」とか「寂寥」とかいった類の語を用いればよい。その意味で、次の如き解説は、『こころ』の根本を捉えていると言える。

○不思議にも近代人の憂愁といふか、悲哀といふか、一種の、既成の道徳や宗教やでは解決出来ない淋しさが漲つて来てゐる。(宮島新三郎『改訂明治文学十二講』)

○友人を裏切つて、その意中の女を妻とするやうになつた者の、われから世間を絶つた孤独の生活を描いたものである。(森田草平『漱石の文学』)

既に、「上」先生と私に於いて、「先生」が「私」に述べた次の言葉が示されていたのである。

私は今より一層淋しい未来の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したいのです。自由と独立と己とに充ちた現代に生れた我は、其犠牲としてみんな此淋しみを味はなくてはならないでせう(上・十四)

まさしく、「先生」は、人間Vのみじめさ、哀れさを知るが故に、「人間を愛し得る人、愛せずにはゐられない人」であり、「それでゐて」、それを知るが故に、同時に、「自分の懐に入らうとするものを、手をひろげて抱き締める事の出来ない人」であつたのだ。

とすれば、「先生」は、結局、人間不信Vに基く絶對的な寂寥に堪え切れず、絶望して自殺したのであるうか。だが、もしそうだとすれば、矢張り、「明治の精神に殉死する」ことの意味が片付かぬ。

五

人間不信Vに基く孤絶の寂寥に苦惱する「先生」は、「人間の為」に「人間を愛し得る人、愛せずにはゐられない人」として「妻の母」を「力の及ぶかぎり懇切に看護」(下・五十四)する。だが、「叔父」の「財産を胡魔化した」(下・九)ことに発する他人不信が、「K」との経緯の過程で己自身に向けられ、自己不信から全般的な人間不信Vに達した末の、「先生」の絶對的な寂寥感は、かかる束の間の慰み事で、癒やすべくもなかつた。譬て、「母の亡くなつた後、私は出来る丈妻を親切に取り扱つて遣りました」(下・五十四)とある如く、「妻」が「妻の母」の代替品になりはするが、「妻はある時、男の心と女の心とは何うしてもびたりと一つになれないものだらうかと云ひました」(下・五十四)という結果にしか至れない。そして、「先生」の心には、「恐しい影」(下

・五十四)——「自分で自分を殺すべきだといふ考へ」(同)が浮かぶようになる。それでも、なお、「先生」は、「死んだ氣で生きて行かうと決心」(下・五十四)しているのである。

「明治の精神に殉死する」という動機が生じなければ、「先生」は、「死んだ氣で生き」続けた筈である。従つて、人間不信Vに基く孤絶の寂寥を、そのまま直接的に「先生」の自殺の原因とする訳には行かぬ。人間不信Vに基く孤絶の寂寥は、「明治の精神に殉死する」行為を生む精神の土壤に過ぎぬ。そして、その風景は、いわば一種の虚無に近いものであるう。そこに、「明治の精神に殉死する」という、虚無に非ざるものが芽生えてゐるのだ。

「自由と独立と己れとに充ちた」(第十四回、上十四)の「明治の精神」であつた。「こゝろ」——「現代国語研究シリーズ4『夏目漱石』」と、高木文雄氏は言う。島田昭男氏も、次の通りに述べてゐる。

「自由と独立と己れとに充ちた時代」明治が、奔出するエネルギーで先生をも含め若者たちの自己確立——主体の形成を可能ならしめた反面、先に指摘したような我執の醜惡な競合をも露呈せざるをえなくなつたのだが、その時代の内包する矛盾を越えんとすれば如何なる生き方があるのか。「『心』——内田道雄・久保田芳太郎編『作品論 夏目漱石』」

確かに「先生」は「自由と独立と己とに充ちた現代」(上・十四)と言つたのだったが、人間自由と独立と己とに充ちた明治Vと言つたのではないのだ。「明治」は明らかにここで言う「現代」に属し、この言葉を「先生」が吐いた時点では、その「現代」には「明治」しかなかつた訳であるが、「先生」が「遺書」を認める時点では、既に「明治」でない「現代」が始動してゐるのである。「明治の精神に殉死する」という「明治」を、直ちに「自由と独立と己とに充ちた現代」と重ね合わせてよいものであらうか。「自由と独立と己とに充ちた現代」は、巨視的立場による人間Vを意味するものであり、「明治」とは、飽くまで、その人間Vの中に特殊な色合いを帯びる時期を形成した人間Vとして捉えたものではないのか。

従つて、「先生」の「遺書」は、「自由と独立と己とに充ちた」時代ではあるが、「明治の精神」なるものの存在する人間Vに生涯を送り、その消滅と共に、それに殉死する者が、もはや、そういう「精神」を有しない「自由と独立と

己とに充ちた」時代を生きる若者に、遺したものの、という意味を有している。

「自由と独立と己とに充ちた」時代とは、自己の飽くことを知らぬ拡大の故に、同時に、人間不信Vに基く孤絶の寂寥の中に生きねばならぬ時代でもあるだろう。しかし、「自由と独立と己とに充ちた」時代、つまり、人間不信Vに基く孤絶の寂寥の時代でありながらも、人明治人Vは、「中」に描かれている「父」の如く、同時に、明治天皇への敬慕に象徴される一つの時代精神——連帯感の中に生きてもいたのである。そのことを示すものとして、「中」の存在も、この作の軽視できぬものである。

尤も、「先生」には、明治天皇への敬慕が露わでない。「先生」は、「私に乃木さんの死んだ理由が能く解らないやうに」(下・五十六)云々と記し、「殉死」に関して、「私は其時何だか古い不要な言葉に新しい意義を盛り得たやうな心持がしたのです」(同)とも書いています。

だが、知識人として、近代の人間孤絶そのもののような人生を送って来た「先生」に於いてさえ、「明治」という人時期Vが終わり、絶対的な孤絶の寂寥から、まさしく絶対孤絶の絶対寂寥に生きねばならぬという、人間Vの絶対危機に直面した時、その意識の底に潜んでいた「明治の精神」なる一種の時代精神が、人明治人Vの連帯感として甦って来たのである。

人間は、遂には、人絶対孤絶Vの中では生きられぬ。いや、「明治」が終わり、今更の如く、今後は、真の人絶対孤絶Vの中に生きねばならぬことを悟った時、「先生」は、「明治の精神に殉死すること、自己の今までの人生が、本当の意味の人絶対孤絶Vの生涯ではなかったことを確認し、その幸せを感じつつ生を終えたのである。人明治人Vは幸福であった——と、あたかも「先生」は語っているかのようである。

しかし、「先生」が自分の「自殺する訳が明らかに呑み込めないかも知れませんが」(下・五十六)と言う「私」は、どうであろうか。「明治」の終わった後生きねばならぬ「私」の前に横たわるものは、人絶対孤絶Vの生涯でしかないものである。少なくとも、「先生」には、「私」の将来がそう見えた筈である。「記憶して下さい。私は斯んな風にして生きて来たのです」(下・五十五)という「先生」の言葉は、結局、「明治の精神」に支えられて、辛うじて孤絶の寂寥の中を生きて来たのだ——という意味と共に、だが、あなたには、その取り纏るべきものも遺されていない、一体、あなたは、これからの人絶対孤絶Vの人絶対寂寥Vの時代を、どのように生きて行くのか——という問いかけを

含んでいるのである。

そして、この問いかけは、勿論、読者それぞれへの問いかけであると同時に、所謂人修善寺の大患Vによって「明治」の間に生を終えることになりかけた漱石の、「明治」の終わった後生きねばならないことに対する、自分自身への問いかけでもあった。

人付記V『ところ』からの引用は、すべて岩波書店発行の『ところ』(大10、36版)による。但し、引用に際し、新字体のある旧漢字は新字体に改めた。

(了)